دار المنظومة
DAR ALMANDUMAH
الرواد في قواعد المعلومات العربية

العنوان:	□□□□ □ □□□ □□□□ □□□□□□□□□□ □□□ □ □□□ □ □□□□ □□□□□□□
المصدر:	مجلة كلية اللغات والترجمة
الناشر:	جامعة الازهر - كلية اللغات والترجمة
المؤلف الرئيسي:	Hassan, Hassan Kamal
المجلد/العدد:	ع8
محكمة:	نعم
التاريخ الميلادي:	2015
الشهر:	يناير
الصفحات:	6 - 32
رقم MD:	752880
نوع المحتوى:	بحوث ومقالات
اللغة:	Japanese
قواعد المعلومات:	AraBase
مواضيع:	التفسير القرآني، معاني القرآن، ألفاظ القرآن
رابط:	http://search.mandumah.com/Record/752880

© 2021 دار المنظومة. جميع الحقوق محفوظة.
هذه المادة متاحة بناء على الإتفاق الموقع مع أصحاب حقوق النشر، علما أن جميع حقوق النشر محفوظة. يمكنك تحميل أو طباعة هذه المادة للاستخدام الشخصي فقط، ويمنع النسخ أو التحويل أو النشر عبر أي وسيلة (مثل مواقع الانترنت أو البريد الالكتروني) دون تصريح خطي من أصحاب حقوق النشر أو دار المنظومة.

Fukuzawa Yukichi's Traditional Understanding and Modern Interpretation of the Theory of Universe

Dr. Hassan Kamal Hassan

Cairo University

Faculty of Arts

ملخص البحث:

"الفهم التقليدي والتفسير العلمي الحديث لنظرية الكون عند المفكر الياباني فوكوزاوا يوكيتشي"

عبرت الثقافة الصينية إلي الشواطئ اليابانية منذ زمن بعيد، و انتشرت تدريجيا ثم سيطرت طي كثير من مناحي حياة المجتمع الياباني سواء الدينية أو السياسية أو الاقتصادية و غيرها، و لكن ظلت فكرة (**Yin & Yang**) التي تعني التداخل التضادي أو التزاوج بين الشيء و عكسه لحدوث و تمام الحقيقة، ظلت هي الأقوى تأثير طي التفكير الياباني، و هو منهج اشد طيه العقل الياباني في تفسير أمور الحياة و بالطبع ظواهر الكون من حوله.

استمر هذا المنهج في تفسير الكون مسيطر طي الفكر الياباني حتي القرن التاسع عشر، و لكن مع ولوج الفكر الغربي الحديث إلي المجتمع الياباني مع بداية هذا القرن، اشتعل الصراع بين القديم و الحديث، و بين التقليد و التجديد في طريقة تفسير أمور الحياة و الظواهر الطبيعية.

لا شك أن العلوم الغربية الحديثة في تفسير الكون و الظواهر الطبيعية ظهرت قبل القرن التاسع عشر مع دخول العلوم الهولاندية إلي اليابان، و لكن معضلة صراع الاختيار بين القديم و الجديد في المجتمعات اللا – أوربية ظهرت جليا في اليابان في القرن التاسع عشر. وقتها اشتد الصراع و الجدال و المقارنة بين ثلاثة حلول:

* صلاحية القديم للعصر الجديد.
* أفضلية الحديث و ملائمته للعصر الجديد.
* المزج بين المجتمع الياباني التقليدي و الاحتياجات الملحة لبناء دولة حديثة.

في هذا البحث، و من خلال المفكر فوكوزاوا يوكيتشي (١٨٣٥– ١ ٩٠ ١) مؤلفاته التنويرية نتناول انتقادات فوكوزاوا للتفسير التقليدي معللا بعدم الملائمة الزمنية و المغالطة العلمية، و كذلك انتقاداته للعلماء الطبيعيين اليابانيين طي قصر نظرهم البحثي، و أيضا ثناءه طي اختفاء المسحة الدينية من تتلك التفاسير.

ثم نستكشف من خلال تحليل و دراسة أفكار فوكوزاوا ، ماهية الصراع و جدوي الصلاحية أو الأفضلية بين القديم و الحديث في تفسير نظرية الكون في اليابان في فترة عصر النهضة.

أخير، هذا البحث هو محاولة للاستفادة من التجربة اليابانية من خلال فهم جانب من جوانب هذه النهضة و صراع مشتعل خلفها في مجتمع تقليدي يتلمس طريقه نحو تحديث يودي به إلي تغريب ٠

福澤諭吉の宇宙論における「陰陽五行」と近代的解釈に関する一研究

はじめに:

大陸文化の吸収は、思想・芸術など、様々な分野で成果を見せている。例えば、絵画や彫刻・建築などの美術の分野であったり、儒教・仏教をはじめとする思想

においても然り、さらに法律をはじめとする政治的な面でも大きな影響を受けた[1]。その中でも、非常に強い関心を持ち、自国の文化に取り入れようとしたのが「陰陽五行」とその実践である。「陰陽五行思想は大陸から早く日本に渡来し、....七世紀初頭まではやや緩慢であったが、六四〇年頃、....急速に浸透し、....多数の百済亡命者を迎えた天智期に至ってその様相は一変し、さらに次の天武朝に及んで陰陽五行思想の盛行は、その頂点に達したと思われるのである。」と言われている[2]。

こうした思想は日本社会に影響を与え続けてきたが、近代西洋の科学知識を取り入れることにより、これまでの宇宙に関する確固たる概念が崩され、新古の対立に関する論争がまずます激動した。

本研究では、以上の論争を明確にした福澤諭吉(1835－1901)を対象とする。本稿では、福澤の研究においてまだ研究されておらず、十分に扱われていないこの領域を焦点に当てる。具体的に福澤が論じた宇宙の創造とその働き、そして伝統的解釈、陰陽五行に対する彼の批判を研究対象とする。福澤の全集の中、とりわけ『世界国尽』や『福翁百話』などにおいて、宇宙、また地球の形成とその働きにかかわる知識の紹介・啓蒙の仕方を考察する

ことにより、彼の思想の一面を検証する。また、福澤が若いころ学習してきた陰陽五行と、近代西洋の科学書にて執筆された宇宙論とその創造説に対する彼の対応を明らかにする。

本論を二章に分ける。第一章では、福澤の全集にてどのように「陰陽五行」が取り扱われたかを考察する。第二章では、福澤が様々な著作を執筆する際に参考にした西洋の近代科学書を検討し、そこで彼がどのように宇宙、そしてその創造説を紹介し、対応したかを考察することによって、宇宙に対する彼の独自的解釈を明瞭にする。

1.「陰陽五行」に対する福澤諭吉

福澤が「陰陽五行」に対して貫いた態度を考察する前に、その思想に関する説明を紹介する。

1－1.「陰陽五行」

まずは、「陰陽五行」という言葉が現代日本の国史辞典でどのように紹介されているかを記す。『国史大辞典』(第一巻)では、「陰陽五行説は一口に陰陽五行というが、陰陽と五行とでは、その由来が異にし、陰陽よりも五行のほうが思想として古いと述べられている。陰陽というと、すぐ易を連想するかもしれないが、易の理論は、経文においては九・六(奇数・偶数)、彖(たん)伝・象伝においては剛・柔によって展開していて、陰陽は、わずかに繫(けい)辞伝において組織的な構成を見せているにすぎないと記述されている。おそらく陰陽が易と結んだのは、戦国時代も末期になってからのことであろう。ただ、九六・剛柔と陰陽とでは、陰陽の方がより抽象的で原理的な性格が濃いから、ひとたび陰陽が用いられるようになると、それ以後は、相（そう）反（正・反）の関係にあるものが、皆陰陽によって代表されるようになったと考えられる。思うに陰陽という思想は、本来は戦国時代中期の

自然科学系の学者たちによって、宇宙自然界の解明のための理論として構成されたもので、その流行の結果は、季節・方位に関連するものはいうに及ばず、易に関するものまでもその支配下に包摂して、自然現象と人事現象とを一気に解説しようとする、いわゆる陰陽説の成立を見るようになる。陰陽説の起りは、戦国時代、斉の鄒衍（すうえん、前二七〇前後か）にあるとされるが、その流行は大体、前漢の中ごろで、その具体例は、董仲舒（とうちゅうじょ、前一九七 － 一〇四）に見る秋春災異説である。董仲舒の秋春災異説とは、『春秋』に記されている自然や人事の変災の記事を、陰陽の見地から説明しようとしたものである。一方、五行に関する記載は、古く『書経』の洪範に見えている。洪範の五行は、文字通り、水・火・木・金・土の五つの物質について、その性状を冷静に記したもので、世にこれを民用五材の思想という。そこには、五をたてまえとする思想構成は間違いなく見られるが、後世のいわゆる五行説のような性格は全く見出されない。思うに、五をたてまえとするものの考え方は、古くから、いろいろあった。民用五材もその一つであったであろうが、五材が民用という点から強く意識せられるようになって、次第に他の五によるものを広くその配下に収め、ついには五材というものを抽象化し原理化することによって、いよいよその包摂力を強化し、自然や人事の現象を打って一丸として解明しようとするところに、五行説の成立を見るようになったと考えられる」(3) と記されている。

一方、歴史的に陰陽五行を辿ると、古代中国の伝説の聖人伏羲（紀元前 5000 年）は、永い間の無数の観察から、宇宙のあらゆる現象と存在が、常に相対立する現象と存在、または相補の現象と存在をもっていることを看破した (4)。すなわち、昼あれば夜あり、男あれば女あり、動あれば静ありというように、目にみえる世界のあらゆる事象に必然的に相対立する現象が現出するのは、その本源の目にみえない

世界にも、根本的に相反する二つの対立している力性があるからであろうと考えて、この二つの対立する力性に、陰および陽という名を与えた[5]。さらに、この二力は太極（太極とは別名、無限・絶対・永遠と呼ばれる宇宙万物の本質である）から派生するものであると判定した結果、「万物は陰陽より成る」という空前絶後の原理を樹立した[6]。

陰陽は東洋哲学、東洋医学の根幹を成す考え方であり、陰陽は神仏が物質世界を創り出す時の法則であり、そして物質世界を創り出す時の材料は音である。神仏が音を材料として陰陽という法則でもって、具体的に物質をどのような順で現わしたのかを説明するのが五行説である。五行説は、水、木、火、土、金の順番に物質がこの世に現れたことを教示すると同時に、水木火土金と物質は循環運動ないし円運動を行っている。五行説では五臓を肝、心、脾、肺、腎としており、更に五志として臓器と感情の関係に言及している。「怒」を木性臓器の肝の帰属とし、「喜」を火性臓器の心の帰属とし、「思」を土性臓器の脾の帰属とし、「悲」を金性臓器の肺の帰属とし、「恐（驚）」を水性臓器の腎の帰属とした[7]。

また、陽遁と陰遁について、「陽遁、陰遁の過程には必ず一定の限界があって、ある限界点に達したあと、陰遁は陽遁に移行し、陽遁は陰遁に移行するが、これを「陰極まれば陽、陽極まれば陰」と古来言ってきたわけである」という説明もある[8]。

1－2. 福澤における「陰陽五行」

福澤は、「陰陽五行」に関して論じる際に、人間の知識の変化性・進歩性を主張している。彼は、宇宙の原則とその働きに関して変化はないが、唯人間の知識が進歩するとともに、未知のものと知識が混ざり合い新しい学識になると以下のように、宇宙の不変の法則と人間の

知識の変化性について論じている。

> 今の文明学を文明として之を和漢の古学に比較し、両者相互に異なる所の要点を求れば、単に物理学の根本に拠ると拠らざるとの差違あるのみ。宇宙自然の真理原則に基づき、物の数と形と性質とを詳にしてその働を知り、遂にその物を将て人事に利用するもの、之を物理学と云う。故に物理の学たる、千万年の古より千万年の後世に至るまで、世界に通じ宇宙に達して変換あるなし。唯人智の進むに従い、古来の未発を発明して以てその学域を広くするのみ。(9)

ここでは、福澤は陰陽五行に関して直接に述べていないが、古来の学問も西洋の新しい学問も、その本質は同じだけれど、証明の過程が違っている。その証明の違いは物理学である。新しい方法を通じることによって、今までわからなかったことが分かり、その方面の学識が増すと論じている。また、人間が工夫した思想は変化することが原則であり、「時代と共に改まり、場所に従て変化し、昨非今是、一得一失」によって変化すると主張している。昔の日本では、宇宙自然を知る方法として最も効果的であったが、人間知識は時代とともに進化し、未発の事実が発見されたと強調している。その例は陰陽五行の説であると以下に述べている。

> 我に陰陽五行の説を唱れば、彼には六十元素の発明あり我は天文を以て吉凶を卜したるに、彼は既に彗

> 星の暦を作り〔太〕大陽〔太〕大陰の実質をも吟味せり。我は動かざる平地に住居したる積りなりしに、彼はその円くして動くものなるを知れり。(10)

以上のように、福澤は陰陽五行の説を説明し、宇宙を知る占いの一つであると主張している。その説では、地球は動かず安定しているが、物理学的には地球は丸く、動いていることが事実であると述べている。また、西洋文明に対して陰陽五行などのような考えは日本の誇りにならず、西洋に勝負する知識ではないと以下のように説明している。

> 我は我邦を以て至尊の神洲と思いしに、彼は既に世界中を奔走して土地を開き国を立て、その政令商法の斉整なるは却て我より美なるもの多し。是等の諸件に至ては、今の日本の有様にて決して西洋に向て誇るべきものなし。日本人の誇る所のものは唯天然の物産に非ざれば山水の風景のみ、人造の物には嘗てこれあるを聞かず。我に争うの意なければ彼も亦争わず。(11)

上述では、伝統に基づく日本は自分の国が最も尊く神の国のように思っているが、今の日本の現状を西洋と比べたら、誇ることができるものはなく、自然に恵められたものを別として、西洋人と並べて「人造の物」にて競争することはできないと主張している。また、福澤が、日本という国の国体を保つ手段の一つが、宇宙論はじめとする近代科学の解釈を「陰陽五行」と入れかえることであると以下の

ようにすすめている。

> 日本人の義務は唯この国体を保つの一箇条のみ。国体を保つとは自国の政権を失わざることなり。政権を失わざらんとするには人民の智力を進めざるべからず。その条目は甚だ多しと雖もども、智力発生の道に於て第一着の急須は、古習の惑溺を一掃して西洋に行わるゝ文明の精神を取るに在り。陰陽五行の惑溺を払わざれば窮理の道に入るべからず。(12)

ここでは、「智力の発生」に最も必然的な勤めは、「古習の惑溺」とりわけ陰陽五行などを含む儒教的な学問をすっかり取り払って、西洋文明の精神を取り入れることであると主張している。また、人間が工夫してきた知識の変化性と後進性について次のように論じている。

> 人間一生涯の力を以て進むべきの点に進み、第二世の者は復た改めて初段より進み、恰も先進の進みし処に至て止むことなれば、その趣は一年立ちの草が年々歳々同一様の成長を為して遂に大幹に至ること能わざるが如し。西洋諸国の学者は多年この原則を推究し、地球上の万物を砕て五十元素と為し、又発見して六十と為し八十と為し、その性質を試験しその功用を説き、又この外には熱、光、越気等、無形力の作用を制御して人間の実業に転用し、以て物産工業の路を開進するその際に、独り東洋の士君子は数十年来、陰陽五行の説に甘んじて曾て進歩の念

慮なく、工業製作の如きは挙て之を下等社会の事に放却したるは誠に遺憾に堪えず(13)。

ここで福澤は、ヨーロッパと日本での知識の発達の比較を行っている。ヨーロッパでは、「地球上の万物」を探求し、それらの性質が実験され、工業にいかすためにその効用性が追求されている。日本は、一種の知識と思想、「東洋の士君子数十年来、陰陽五行の説に甘んじて」いるので、知識の進歩の念慮がないと論じている。続いて、次のように具体的に説明している。

固より我東洋士人の教育に於て、道徳なり、気節なり、又風韻なり、毫も他に恥る所なくして遥にその右に出ること疑なしと雖ども、唯物理原則の一事に至ては、今の老儒が万巻の書を読むもその拙劣は彼の炊婦に等しきのみ。
西洋諸国に物産工業の盛なるは決して偶然に非ず。陰陽五行論の中に教育せられたる我東洋人の未だ及ぶべからざるや明なり。その業、盛なればその製造は巧にしてその価は必ず廉なり。又その物品の運転売買の法に於ても専ら学問上に基き、大体を論ずるには経済学あり、実際に於ては銀行の法あり、保険の法あり、会社の法、簿記の法、些細の事に至るまでも自から一課学の体裁を成して、之を教え之を習うて然る後に実地に施すその趣は、恰も師を出すに平生軍法を研究して進退自から定則ある者に異ならず。之を彼の人々個々の手練を以て商業に従事

する者に比すれば固より同日の論に非ず。(14)

このように、福澤は日本とヨーロッパでの教育を具体的に比較している。日本の教育は道徳や気節、風韻などには優れているが、物理原則については優れた儒学者がどれだけ沢山の本を読んだところで西欧の煮炊き女と同じような知識しかないと主張している。一方、ヨーロッパでは、産業が進んでいることは決して偶然ではなく、「些細の事に至るまでも自から一課学の体裁を成して」いるからであると述べている。例えば、物品の運転を始め、売買などの体制は、「銀行の法」や「保険の法」、「会社の法」、「簿記の法」など学問（経済学）に基づいている。ヨーロッパの人々は個々、これらの知識を教えたり習ったりする後、「手練を以て商業に」施していると説明している。

また、福澤は日本と中国における「陰陽五行」を含む儒教の浸透性、そして各々の社会にある対抗的他思想などを以下のように比較している。

畢竟支那人がその国の広大なるを自負して他を蔑視し、且数千年来、陰陽五行の妄説に惑溺して事物の真理原則を求るの鍵を放擲したるの罪なり。天文を窺て吉凶を卜し、星宿の変を観て禍福を憂喜し、竜と云い麒麟と云い鳳鳥、河図、幽鬼、神霊の説は現に今日も彼の上等社会中に行われて、之れを疑う者甚だ稀なるが如し。何れも皆真理原則の敵にして、この勁敵のあらん限りは改進文明の元素はこの国に入るべからざるなり。(15)

上述においては、福澤が中国における「陰陽五行」の浸透性について紹介し、その思想が疑われることがなく中国社会に広がったと論じている。つづいて、日本と比べて以下のように述べている。

> 我日本にもこの敵なきに非ざりしかども、偶然の事情に由て大に趣を異にする所あり。我国に於て鬼神幽冥の妄説は、多くは仏者の預る所と為りて、専ら社会に流行したることなれども、三百年来、儒者の道漸く盛にして仏者に抗し、之に抗するの余りに頻りに幽冥の説を駁して、遂には自家固有の陰陽五行論をも蝶々するを忌むに至れり。例えば儒者が易経を講ずれども、唯その論理を講ずるのみにして卜筮を弄ぶを恥るが如し。その仏を駁撃するは恰も儒者流の私なれども、この私論の結果を以て惑溺を脱したるは偶然の幸いと云うべし。(16)

ここで福澤は、日本が中国と同様に、儒教を尊んではきたが、儒教が受け入れられた日本の環境が中国とは異なっていたため、受容の過程において元の儒教の形が変化し、同様な影響が及ばされず、趣も異なったと主張している。また、環境の問題だけでなく、中国においては儒教に対する敵がいないために儒教が全般的に広く受容されたが、日本の場合は仏教という思想が全土に広く反映されていたため、日本社会全体に及ぼした影響は中国のそれとは異なっていると、以下に述べている。

> 支那の儒者も孔孟の道を尊び、日本の儒者も孔孟の書を読み、双方共にその教の源を同うして、その社会に分布したる結果に於て全く相反するは、偶然に非ずして何ぞや。蓋し支那の儒教は敵なきが故にその惑溺を逞うし、日本の儒教は勁敵に敵して自から警めたるものなり。(17)

また福澤は儒教に対する中国人と日本人の対応の仕方の相違を解説している。その相違の中で、日本で儒教を受け入れ、対応したのはほとんどが武士であり、「文采風流の中に自から快活の精神を存し、よく子弟を教育してその気風を養い、全国士族以上の者は皆これに靡ざるはなし。改進の用意十分に熟したるものと云うべし」と主張している(18)。また、日本人が中国から渡った儒教を改進した要因の一つは、「百年前より医師の中に早く洋書を講じて蘭学者流の一派を成し、純粋の西洋説を主唱して改進の媒介を為したるの功も亦少なしとせず。」と述べている(19)。

以上のように、福澤は、「陰陽五行」を含む儒教的思想が近代化への妨げであると考えている。しかし、儒教が創造された土壌である中国と比べたら、それほど日本の近代化への妨げとはならないと論じている。儒教が日本に渡来したときには、日本社会に浸透していた仏教をはじめ、その後蘭学という学問があったので、中国ほど科学の強い敵にならず、日本の近代化が進んだわけであると説明している。

2. 福澤の宇宙論における近代的解釈

福澤には、物理学に関して執筆した書物が数多くあるが、宇宙の創造や軌道といった物理的働きに関する記述は少ない。その少ない記述は、彼の生涯のある二つの時期に書かれたものである。第一期は、生涯の前半にて『世界国尽』などを執筆したころである。第二期は、日本の開国40年後であり、『福翁百話』と『福翁百余話』を執筆した際である。

そこで本節では、一点目として、福澤の宇宙論に根本的に取り扱っている先行研究は稀であるが、本研究にて使用する『世界国尽』に関する研究を紹介し、参考にする。二点目では、宇宙とその働きに対する福澤の近代的解釈を明らかにする。

2−1. 『世界国尽』に関する先行研究

『世界国尽』に関する最新の研究は、田部俊充が2004年に発表した「19世紀アメリカ地理教科書と「世界国尽」」である。田部氏は、アメリカ建国期におけるアメリカ地理教育状況について、デーヴィッドソンの『地理簡約』(1784年)とモースの『易しい地理』(1790年)に焦点を当てて分析しつつ、その特性を論じている[20]。また、アメリカ地理教育の発展期における地理教育の状況について、S.G.グッドリッチ(Goodrich, Samuel Griswold 1793-1860)の出版の背景と『地理に基づくパーレー万国史』(1875年版)の内容構成およびその特色について報告した。田部氏の研究では、全般的にアメリカ初期地理教育界の全体象や日本の地理教育への影響を明らかにする試みとして、グッドリッチの作成した教科書・地図帳の地理に関する業績のリストおよび福澤諭吉の著作『世界国尽』との対比から考察する」と主張している[21]。

一方、源昌久氏は、「福沢諭吉著『世界国尽』に関する一研究：書誌学的調査」において、『世界国尽』をとりあげ内容を調査･検討し、その原拠本の確定を主目的としている(22)。源昌久氏は、上述の論文において、『世界国尽』について書誌的調査を行い、『頭書』の内容および表現上の特徴について論じている(23)。そして、『頭書』の原拠本に関する調査を行い、「挿絵図の原典」を調査し、集計結果を出し、福澤の特徴を明らかにしている(24)。また、「本文および頭書(挿絵図)の原拠本について比較し論じている(25)。同氏は、最後に「福沢が『頭書』を著訳述する際、参照し、執筆上、強い影響を与えた書物、ＭＳＧの著者 Mitchell および彼の著作」について結語している(26)。

松田幸一氏は、「福沢諭吉の足跡を追体験する小学第 6 学年の歴史学習―『世界国尽』を中心資料として―」にて、「人間のライフヒストリーを中心に扱いつつ、時代相を追いかけていくという手法」を探り、福澤諭吉を選抜したと述べている(27)。彼は、上述の論文を歴史科目の授業実践の資料として学生に『世界国尽』を読ませ、福澤諭吉を始めとする人物に関心を持ち続けている子供達に、「人物を調べれば調べるほどエピソードなどが出てきて面白いということである」と述べている(28)。本稿の目的は、「授業において、見方を変える教材や資料を準備して、その人物を調べていくことによって、その人物に対する関心がわき上がり授業後もその人物を追い続ける子供が出現することになる」と言い、「授業を終えて、何人の子供たちが動き続けているか、この自ら動く子供たちの人数によって、授業の成果がわかり、次の授業へのステップにもなろう」と主張している(29)。

樋口節夫氏は、「福沢諭吉の学校地理―代表的著作を中心－1－」において、福澤が明治時代の「近代地理教育に与えた影響」を論じている(30)。そこでは、彼が西洋での見聞や書物をもとにし執筆した地理に関する著作を選抜

した。その中で、1860 年に報告した「アメリカ・ハワイ見聞報告書」にて、福澤がアメリカで見た「市中町造のこと・・・十字正法。町帳 10 間余。町の中程板敷、車馬路。軒下を往来の人通行」などについて紹介している(31)。また、1862 年に出版された『西航記』において、福澤が「幕府の遣欧使節（21 名）に随行し、ヨーロッパ諸国を巡遊したときの日記」を説明している(32)。そこで、渡来した国々、例えば「香港」や「巴理斯」、「竜動」、「ハーゲ」、「別林」、「ペテルスブルグ」、「ロシフォルト」、「リッサボン」、「シブラルタル」、「アレキサンドリアからシュエズまで」など遊行について紹介している(33)。

また樋口氏は、福澤が 1865 年に出版した『唐人往来』について、「西洋の事実を伝え、日本国民の変通を促し、一日も早く文明開化の門には入らしめようとしたのが執筆の目的であった。その一端を紹介しようと思う。」と述べている(34)。そこで、樋口氏は、福澤が語る幕末の情勢と列強の圧力により結ばれた通商条約や、これらの国々との貿易、攘夷の問題、そして学者たちの尽くすべき啓蒙的役目などについて紹介している(35)。樋口氏は、福澤の「幕末世人への啓蒙は開港・和親・海外諸国に対する防衛論争に及ぶわけであるが、『西洋事情』では各国の政治・収税・国債・紙幣・商人会社・外国交際・兵制・文学技術・諸学校・新聞・文庫・病院・・・中略・・付録に及び、海外への開眼の必要とその諸相が叙述されているが、アジア認識にもまして西洋社会への関心が問題になる。」と述べている(36)。樋口氏は、最後に参考にしているのは『西洋事情』である。そこで、彼は福澤が『西洋事情』にて紹介してい

る西洋諸国の社会や政治などの諸制度を説明し、「明治維新政権の成立後、西洋世界に対する戒告と国内における諸制度変革と思想形成を準備する上で大きな役割を演ずることになる」とまとめている(37)。樋口氏は、「本稿Ⅰに収めた4冊子は、要約すれば『西航記』の成果が『西洋事情』に集大成されていると思う。諭吉の学問の趣意には、本を読むばかりでなく、第1がはなし、次には物事を見たり聞いたり、次には道理を考え、その次には「智見を散ずる」ことをその帰結として含んでいた。明治維新前後の啓蒙書として、更に諸書の刊行が準備されていた」と結論している(38)。

2－2. 福澤の宇宙論

福澤は宇宙に関していくつかの著作で論じているが、主要な課題とし詳細に議論することはまれである。宇宙に関する彼の記述はほとんど明治初期に出現されたものである。その中で、1868 年に出版された著作、『訓蒙窮理図解』にて、福澤は宇宙に関する知識の発達と西洋文明の科学を示し、以下のように述べている。

> 遊星とはこの日輪に附たるものにて、古はこれを五星と唱え、木火土金水の名あり。西洋人の窮理にて、追々同類の星を見出し、当時はその数既に七、八十に及べり。その内最も大なるもの八あり。遊星の体には元光明なく、日輪の光を受て輝くのみ。即ち此の世界も一個の遊星なれば、他の遊星より我地球を望見れば、矢張り星の如くに見ゆべし。一通り考れば、日輪は高し、月輪は遠しなどと思うなれども、

前にもいえる如く日輪の外に又日輪ありて、その数幾百万なるを知らず。その遠きことも亦譬んかたなし。恒星の内にて最も近きものゝ里数を測りしに、百万、千万、一億と計えその一億を七千八百五十合せたる数なり。十露盤の桁にすれば、一の数より十五桁上の数に当る。(39)

ここでは、惑星が太陽の周りをまわっており、当時のヨーロッパでは、すでに知っているだけでも 7、80 の惑星を発見していたこと。そのうち、大きいものが 8 あり、太陽の光を受けて輝くこと。地球も一つの惑星であり、ほかの星から地球を見ると、地球から星を見るのと同様に輝いて見えるということを説明している。また、太陽も一つだけではないことや、恒星との距離についても解説している。

続いて、福澤の著作の中で、自然現象に関して詳細に紹介されたのは、『世界国尽』である。福澤は、同書の「序」にて、執筆した目的について、次のように述べている。

然れば則ち天下の禍福は、その源蓋し他にあらず、国民一般の知愚に係ること推して知るべきのみ。今爰に世界国尽の著あるも、専ら児童、婦女子の輩をして世界の形勢を解せしめ、その知識の端緒を開き、以て天下幸福の基を立んとするの微意のみ。(40)

上述のように、本書の執筆の目的は、日本の幸福を実現するため、一般の日本人、とりわけ「児童、婦女子」に地理的と天文学的な知識を啓蒙することである。そのため、わかりやすく簡潔な内容を提示しつつ、図解によ

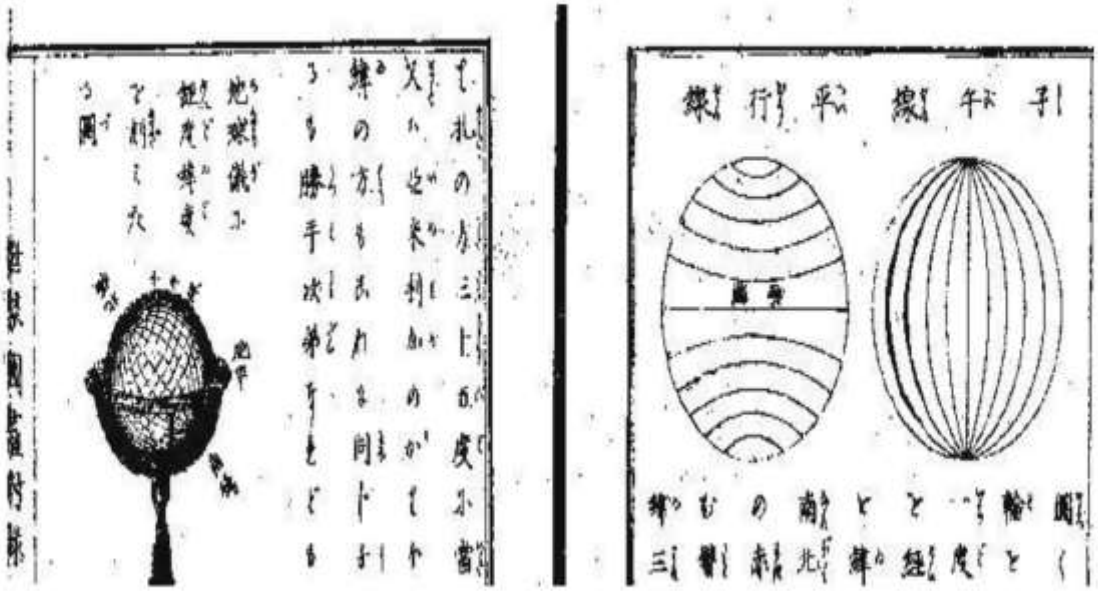
って理解を深めることを目指している。

福澤は、『世界国尽』において、「土地の高きものを山という。但し地学に於ては、千尺以上なるものを山と唱え、千尺以下のものを岡という。山の高さを幾尺と計るは、海面より勘定したるものなり。（中略）地球の大いなることを思い知るべし。山より火を噴き烟を出すものを火山という。世界中にその数三百あり。この内に二百は島国の山なり。」と簡単に山や火山を説明している[41]。そして、図解を用いながら、遊星や地球を含む宇宙について、以下のように述べている。

天文の地學
此世界も一個の遊星なり遊星とハ圓き物にて空中に浮び日輪の周圍を廻りて日の温氣と光とを受る星なり此日輪に附屬の遊星數多あれども大ひなるものの唯八個のみ即ち地球も其の一なり地球の圓き證拠

この世界も一個の遊星なり。遊星とは円き物にて、空中に浮び、日輪の周囲を廻りて、日の温気と光とを受る星なり。この日輪に附属の遊星数多あれども、大いなるものは唯八個のみ。即ち地球もその内の一なり。地球の円き証拠は、船に乗て大洋より陸を詠るに、始は山の頂のみを見付け、次第に陸へ近づくに従い麓の低き処も見るべし。又地球の影の月に映ずるときは月食を起す。その影かならず円し。影円ければその物も円きこと知るべし。[42]

そして、地球における、距離や、公転、形を細かに次のように解説している。



地球の周囲は一万三百五十五里余あり。南北を軸にして西より東へ転び、十二時の間に一廻を終る。これを一昼夜とす。即ち地球の自転なり。斯く自から転びながら、三百六十五日二分五厘の間に、日輪の周囲を一廻して本の処に帰る。これを一年とす。即ち地球の公転なり。斯く日輪の周囲を転廻する間に、或はこれに近づき、或はこれに遠ざかり、且その光を真直ぐに受ると斜に受るとに由て、寒暑一様ならず (43)

ここでは、どのように地球が太陽のまわりを廻るのか図を使って説明している。その後、「恒星」と「遊星」について解説し、遊星が恒星のまわりを廻るものであると述べている。そして、「五星」といわれた木火土金水の星々も遊星であり、地球もまた遊星の一種であることを主張している。したがって結果として、他の遊星から地球を見たら星のように見え、さらに恒星が太陽と同じ種類の星であることを論じている。

2－2. 第二期における福澤の宇宙論

次は、福澤が後半に宇宙に関して執筆した書物を見てみよう。その中で、「宇宙」、「天工」及び「天道人可なり」、そして『福翁百余話』の「物理学」の論文が最もこの課題に関連している。

福澤は「宇宙」について「宇宙のそのままを観じてその美麗、その拡大、その構造緻密微妙なる、その約束の堅固不抜なるに感心するのみならず、これを思えば思うほどいよいよますます際限なく、ただ独り茫然としてやむのみ」と述べている(44)。福澤は、宇宙の働き、そして拡大や美などに感動し、際限ないと形容しているが、「宇宙は誰れかに造られたものか、又は自然にできたるものかは、宗教論の喧しきところなれども、その議論はしばらくおき」と宗教的観点から宇宙論を切り離して捉えており、関心が非物質的なものでなく、あくまで物理学の一部であるとはっきりと示している(45)。福澤の関心の最も重要な点である近代的物理学の法則を、「宇宙」論文にも当てはめ、「之を支配するに一定不変の規則を以てしてかつて誤りたることなきこそ更に一層の不可思議なれ。思議すべからざるを思議し想像すれば、唯ますます人智の薄弱なるを発明するのみ。」と述べている(46)。

上の引用で、福澤は、宇宙の創造についてだけではなく、この宇宙を支配するのに一定不変の物理的規則があり、自然界の様々な現象には必ず一つの法則があることに強い関心を持っている。この法則は一度も間違ったことがないとも強調して論じている。その後に、落下の法則を例にとり、物を落として起きる現象のルールを解説している。このような法則は場所時間に関係なく採用されるルールで、これが本当の驚きであり、知っておくべき知識であると強調している。そして、「天工」の論文において「宇宙の万物は常に動き、常に変化し、随って生じ又随って滅して、無始無終、遂に際限あることなし。中略）物質の変化不滅斯の如くにして、之を構造組織しこれを運動変化せしむ

るに・・[47]」と言い、「万物一貫の原則にして、無生界一塊の金石、一粒の砂より一塵一挨の微に至るまでも、この原則中に包羅せられざるものなし。[48]」と述べている。

ここでは、同じ種類が幾千万あっても、それは全部一つの法則に従って行動していると主張している。ここで述べられていることは、宗教的な話ではなく、フィジカル世界の話であり、砂の一つまでもこの法則にしたがっていると述べている。この自然界には様々なものが複雑に絡まっており、人間の力（世界）に及ばないところがあると主張している。そして、『福翁百余話』の「物理学」において、「物理学はこの心理原則を教うるものにして、人間万事経営の大本は何れの辺に在るやと自問すれば、天然真理原則に在りと自答せざるを得ず[49]」と述べている。福澤の主要な点は、日本人に実用的な意味を含みながら物理的な宇宙の法則を強調して教えようとしていることである。

福澤は、宇宙の創造や創造主などについては一切関知せず、その宇宙の原則や法則に関心を持ち、それについて系統立てながら、分かり易く、かつ熱心な説明を試みた。言い換えれば、福澤の関心は一貫して科学的研究に対してのみであり、宇宙を例にとっても物理的原則を用いながら、新たな学識を広めることを重視している。

結論

これまで、日本社会に浸透してきた宇宙論の伝統的解釈、陰陽五行と近代的注釈に対する福澤の見解について論じてきた。そこで次に、彼の対応の特徴をまとめて指摘したい。

福澤の特徴の一つは、使用した西洋の科学書を一言一句違わずに翻訳したのではなく、日本文化や習慣に該当するように新たな知識を日本化したことである。

江戸時代中期以降、西洋の自然科学書が日本に多く紹介されていた。

これらは自然科学の教養書として、藩校や上級小学の教科書として読まれた。例えば、当時広く読まれた著作の一冊は『博物新編』である[50]。ホブソンの意図は自然神学の立場から自然科学の知識を伝えることである。『博物新編』には、神の構想などの自然神学あるいはキリスト教と結びついた字句が多く述べられている[51]。また、このような文面は、幕末・明治時代初期に熱心に科学知識の啓蒙活動をした小幡篤次郎の『博物新編訳解』には明瞭に見られるのである[52]。

これらの書物には、「天」や「天下」、「天工」などの伝統的な日本の語義でなく、新たに人格的主宰者の「神」の意味において使用されていることが多いことがわかる。換言すれば、これらにはキリスト教の神をさす「創造」や神により「創造されたもの」などのように創造神を表す言葉を多くつかわれながらも、これらの書物には神の創造の巧緻と思慮そして神の無限性に言及する分を自然科学の説明の間に含められている。以上の主張に対し福澤の訳述と理解はどの程度であったのであろうか。

福澤が宇宙を論じる際にどのような西洋の自然科学を使用し、どのように翻訳したかを見れば、彼の特徴的対応が明らかになるだろう。彼が『世界国尽』などを執筆する際に用いた西洋の地理書は、ミチェルの『Geographical Reader』である[53]。同書には、数多くの箇所において「Saviour」や「Creator」、「Lord」などが用いられている[54]。福澤は上書を使用したにもかかわらず、『世界国尽』や『訓蒙窮理図解』などには上述した用語を一切使用していない。

言い換えれば、福澤は西洋の自然科学にて論じられている宗教的解釈を排除して、これらの著作に書かれている科学知識だけを抜き取り、さらにそれを日本化しようとしたのである。

つまり、西洋の自然科学にて論じられている宗教的解釈を排除して、これらの著作に書かれている地理・科学知識を合理的に日本の一般の

人々に解り易く紹介しているのだ。福澤は特別にキリスト教に対し敵対的な態度を貫いたわけでなく、明らかに宗教などが迷信であるとみなしているようである。

以上からわかるように、福澤は日本の近代化のため、西洋文明から取り入れるべき知識を受け止める際に、西洋の著作を参考にしつつも、キリスト教を含む彼にとって非合理的な全箇所を排除し、学問的な知識だけを選抜し日本人に紹介している。また、これらの知識を日本人に啓蒙しようとする際に、何よりも文明の「進歩」を妨げる古風的考えを排除することを強調している。それは以下をみると明らかである。

> 即ち今日、我日本の文明を進歩したる所以の原因にして、東洋諸国曾て無き所のものなり。近年は支那人も稍や開成の企てある様子なれども、誠に千万中の一部分にして、容易にその力を全国に及ぼすに足らず。支那をして近時の文明に移らしめんとするには、先ずその人心の根本を改造せざるべからず。迚も日本の先例を引て速成を期すべからざるなり(55)。

福澤は19世紀末に、東洋諸国が後進している原因を上述のように、考察している。福澤の考えでは、東洋諸国の中で後進状況から抜き出て、近代化に成功したのが日本であり、その要因は、日本「人心」の根本が改造されたからであると結論している。

註

1. 伊原 昭、「"陰陽五行説"の影響 ： 万葉集を主に」日本文学研究 22, 1-14, 1986-11、P.1(注坂本太郎、『日本古代史の基礎的研究 上 文献編』(東京大学

出版会 1964 年 5 月）PP. 312-35

2. 上掲書 P. 2 （吉野裕子、『陰陽五行思想からみた日本の祭』弘文堂 1973 年 6 月 P. 33)
3. 『国史辞典 第一巻(あ～い)』、国史大辞典編集委員会、古川弘文館 1979 年・3 月、P. 905
4. 鈴木英鷹、「東洋医学から見た精神医学:陰陽五行説による検討」『大阪河崎リハビリテーション大学紀要 2』(PP. 5-14)、2008、P. 6
5. 上掲書 P. 6
6. 鈴木英鷹、『食養手当て法第3 版』清風堂書店, 大阪2002, P. 4；上掲書 P. 6
7. 上掲書 P. 5
8. 小林三剛、『凍洋医学講座第1 巻』自然社、東京 1979、P. 76；（上掲書 P. 7)
9. 福澤諭吉、『福翁百餘話』、時事新報社 明治 34 年 P. 75
10. 福澤諭吉、『文明論之概略・巻之三』、著者蔵版 1875 年 P. 90
11. 上掲書 P. 91
12. 福澤諭吉、『文明論の概略・巻之一』P. 100
13. 福澤諭吉、『時事小言』著者蔵版 1881 年 P. 37
14. 上掲書 PP. 37-8
15. 上掲書 P. 225
16. 上掲書 P. 225
17. 上掲書 P. 226
18. 上掲書 P. 226
19. 上掲書 P. 227
20. 田部俊充、「19 世紀アメリカ地理教科書と「世界国尽」『人文地理学会大会 研究発表要旨』 2003、P. 28

21. 上掲書 P. 28
22. 源 昌久、「福沢諭吉著『世界国尽』に関する一研究：書誌学的調査」『空間・社会・地理思想 2』1997、P. 2
23. 上掲書 PP. 3-4
24. 上掲書 PP. 6-11
25. 上掲書 PP. 12-5
26. 上掲書 PP. 15-6
27. 松田 幸一他、「福沢諭吉の足跡を追体験する小学校第 6 学年の歴史学習 ―『世界国尽』を中心資料として―」『愛知教育大学教科教育センター研究報告 14』1990 年、P. 113
28. 上掲書 P. 121
29. 上掲書 P. 121
30. 樋口 節夫「福沢諭吉の学校地理―代表的著作を中心に－1－」『地理学報 (23)』1985 年、P. 1
31. 上掲書 P. 2
32. 上掲書 P. 3
33. 上掲書 PP. 4-6
34. 上掲書 P. 7
35. 上掲書 PP. 7-8
36. 上掲書 P. 8
37. 上掲書 P. 12
38. 上掲書 P. 12
39. 福澤諭吉、『訓蒙窮理図解・下』慶応義塾同社 1868 年 P. 13
40. 福澤諭吉、『世界国尽・一』、慶應義塾蔵版 1869 年 P.3
41. 『世界国尽・六』 P. 21
42. 上掲書 P. 5
43. 上掲書 P. 7

44. 福澤諭吉、『福翁百話』時事新報社 1897 年 P. 17
45. 上掲書 PP. 17-8
46. 上掲書 PP. 20-1
47. 上掲書 PP. 21-2
48. 上掲書 PP. 25
49. 上掲書 PP. 99
50. 八耳俊文、「幕末明治初期に渡来した自然神学的自然観—ホブソン『博物新編』を中心に—」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報 4』、PP. 127-140、1996 年、P. 136
51. 上掲書 P. 136
52. 上掲書 P. 136
53. S. A. Mitchell, *Geographical Reader a System of Modern Geography*, Philadelphia 1840 P. 22
54. Ibid P. 22
55. 『時事小言』 P. 227